

□ 次の文章「I」と文章「II」を読んで、あとの問いに答えなさい。

文章「I」

先ほど①「余人をもって代えがたい」存在にならない限り、究極的には自分を守れないだろうと書きました。そして、このことは、近年になればなるほど切実な課題（努力目標）として我々に突きつけられるようになったと断言できます。A、これからの社会ではAI（人工知能）やロボットの登場で、事務労働者（一昔前はホワイトカラーと呼ばれていました。白襟の服を着て事務所で働く人という意味です）の仕事がなくなるとの予測が樹てられていくからです。その代わり肉体労働者（一昔前はブルーカラーと呼ばれていました。青襟の服を着て現場で働く人という意味です）の仕事と賃金とともに増えるだろうと予測されています。

現に、② AIやロボットに人間の仕事や活動を肩代わりさせる動きがさかんに見られだしました。メガバンク（巨大な資産・経営規模を持つ銀行）が業務の効率化を図るためにAIを大いに活用すると表明したことなどが、その最たる例です。当然、これにもなって、人員は削減されます。B、AIの活用は、実用分野だけに止まらず、小説の執筆といった創作分野にまでおよびはじめました。B、このような時代に生き残れるのは、オンラインワンの人間だけだともされます。オンラインワンのとは、要は「余人をもって代えがたい」存在のことです。

では、こうした現代社会の中で、「余人をもって代えがたい」存在となるにはどうしたらよいのか。答えは極めてシンプルです。独創的な発明・発見を成し遂げるか、あるいは取得するの

が甚だ困難な資格を手に入れるといったことができれば、問題はありません。しかし、これは誰もが目指せる途ではありません。ごく普通の人間が達成できる方策はただひとつしか残されていません。

自分の思いや考えを、自分の言葉で相手にきちんと伝えられ、そのうえ自分の属する組織にとって役に立つアイデアや情報を※随時提供し、かつ実行できる存在になることです。実は、この点と大いに関係しますが、最近、テレビを見ていて印象に強く残ったことがあります。それは、鮪の完全養殖に成功したことで知られる近畿大学の水産関係の現場をあずかる担当者が語っていたことです。ある時、エサを与えてもまったく喰いつきがないことに「おかしいな」と思って、※生け簀の中に潜って調べると、稚魚が全部死んでいたそうです。これは四角であった生け簀の角に稚魚がぶつかって死んだためです。そこで考えて、円型の生け簀に代えたらこうしたことが生じなくなったそうです。

C、次に新たな難問が生じました。夜間、近くを通るトラックの照明に稚魚が驚いて、やはり大量に死んだらしい。そこで再び考えて、夜も生け簀に照明を当てるようにしたら、不幸な事態の回避に成功したということです。僕は、この話を聞いて大層面白かった。それは、苦境を脱するには工夫が必要だということ、成功するには、それなりの理由があると改めて納得がいったからです。とにかく、こうした工夫話を聞くと、僕はとても嬉しくなります。

さらに、③ここでもう一段、階段を上がるためには何が必要か。「余人をもって代えがたい」存在となるためには、当然のことながら、まずは読み書きの能力が十分に備わっているという条件が付くと思います。では、その読み書きの能力はどうし

たら身につくのかといえ、これはどなたも同じことしか申し上げられないでしょう。特効薬などはなく、まずは読書に励めということですよ。

（家近良樹 『歴史を知る楽しみ』 一部改変）

※（文中のことばの意味）

随時 … いつでも。その時々。

生け簀 … 魚や貝などを生きたまま飼っておく所。

問 1

最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

さい。

- | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|
| ア | A | なぜなら | B | そして | C | しかし |
| イ | A | それは | B | むしろ | C | けれども |
| ウ | A | やはり | B | だから | C | いっぽう |
| エ | A | やがて | B | ところが | C | さらに |

問 2

線① 「『余人をもって代えがたい』存在」とはどのような人のことですか。文中から九字でぬき出しなさい。

問 3

線② 「AIやロボットに人間の仕事や活動を肩代わりさせる動きがさかんに見られだしました」とありますが、「AIやロボット」が「人間」に与える影響として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 業務を効率的に行うことができるが、事務労働者の仕事が減少してしまう。

イ 実用的なことだけでなく、創作分野でも人間による労働が不要とされる。

ウ 人間の仕事が奪われ、ほとんどの労働環境において人員が削減される。

エ 人間が生き残りをかけ、「余人をもって代えがたい存在」を目指して競争を始める。

問 4

線③ 「ここでもう一段、階段を上がるためには何が必要か」とありますが、何が必要ですか。文中のことばを使って、三十字以内で書きなさい。句読点なども字数に数えます。

文章「II」

若いみなさんも一度は耳にしたことがあるかもしれませんが、日本では二〇三五年ごろまでに半分の仕事、人工知能（AI）やロボットに取って代わられると予測されています。子どもたちの三人に二人は、今は存在しない職業に就くとも言われています。AIがさまざまな分野に進出し、産業構造の枠組みも変わってくると思われています。人口減少時代を迎えた日本にとって、不足した労働力をAIが補ってくれるのはありがたいことですが、一方ではこれまで④人間にしかできないと思われていた仕事があっさりと奪われてしまうのも、また避けようのない未来予想図のようです。

実は私がやっている記者の仕事も、安泰ではないと言われてます。米国の代表的通信社であるAP通信では、すでに企業の決算原稿の作成をほぼAIに任せています。労働力を補うという側面もありますが、AIの書いた原稿はほとんど間違いを犯さないという特長が導入を後押ししています。

記者の仕事をしているとよく分かるのですが、人間が一つ一つのデータや数字を調べてパソコンに打ち込んだ場合、どれほど注意深く作業をしても間違いは必ず起きてしまいます。反対に、膨大なデータの中から取り出すパターンが決まっている情報を集めて記事を自動生成するのは、AIにとってはお手のものです。記事にどのようなデータが必要になるのか、最初は人間がプログラムしなければなりません、枠組みさえ作ってしまえば、人為的なミスをなくすことができます。

AP通信では「AI記者」を導入して以降、出稿記事の本数が大幅に増え、反対に執筆時間はずいぶん短縮されました。作業の効率化の観点から見れば、願ったり叶ったりで、お天気原

稿やスポーツデータなど他の分野にも近いうちに活用範囲が広がっていくと考えられています。

仕事を奪われる記者の側には、不満が渦巻いているのではないかと推察しましたが、そうでもないようです。注目度の低い記事はAIに任せて、関心の高い企業に関する記事は従来通り記者が執筆するというすみ分けができるようになったため、AI記者の評判は上々だということです。仕事の自由度が増し、単調な記事に割いていた時間は、連載企画や特ダネ取材などの、より重要な仕事に充てられるようになりました。かつては炊飯器や洗濯機の発明が炊事や洗濯の労力を軽減し、人間は空いた時間を有効活用できるようになったのと同じことが、今度は頭脳労働の現場でも始まっているのです。

⑤AIの得手不得手を知ることが、人間に固有の力とは何かをあらためて問い直すことにもつながります。先ほどの決算原稿のように、限られた枠組みの中でより早く正確に答えを出すような戦いをAIに挑んでも、人間には勝ち目がありません。

特定の状況からパターンを読み解き、法則性を見つけてるのは人間の専売特許でしたが、そうした分野にもAIは触手を伸ばしつつあります。しかし、枠組みそのものを決めたり、意味を理解したり、答えが一つに定まらない問いを考えるとといった営みは苦手としている、というのが現時点でのAIの姿です。記者が対抗する手がかりも、どうやらその辺りにありそうです。

（ 中略 ）

「トロッコ問題」という言葉を聞いたことがありますか？あくまで仮定の話ですが、トロッコに乗って走っている時に制御が効かなくなり、そのまま進めば線路上で作業をしている五

人を轢いてしまう危険に直面します。ポイントを切り替えて別路線を選ぶこともできますが、その場合も作業員一人を轢くことは避けられません。この際、「五人を助けるために、一人を轢く選択は許されるのか」というのが、その問題です。

当然、どちらも選びたくはありませんよね。シンプルに考えれば、犠牲者が少ない方が「まだまし」ということになるのかもしれませんが、**※不可抗力**とはいえ自分の選択で人ひとり轢いてしまうわけですから、道徳的に罪の意識にさいなまれるのは避けられません。このように二つの判断の板挟みにあつて、道徳的にどちらが正しいか迷う状態を「道徳的ジレンマ」（モラルジレンマ）と言います。

実は、同じ問題が自動運転車の開発でも持ち上がっています。かつてはいつ実現できるか分からない夢の乗り物と言われていた自動運転車ですが、道路状況を見極めるAIの進歩や暗闇で障害物を感じするセンサー技術の向上は目覚ましく、日本自動車工業会は二〇三〇年までに人が運転に一切関与しない「完全自動運転車」の普及を見込んでいます。専門家の間では「このままテクノロジーが進歩すれば、**⑥技術的な課題はいずれすべてクリアできるのではないか**」と考えられています。高速道路の逆走や、アクセルとブレーキの踏み間違いによる急発進といった**※ヒューマンエラー**による事故を根絶できる日も遠くはなさそうです。マイカーに行き先を伝えて、あとは車の中で本を読んだり寝ていたりすれば、目的地に到着する時代がすぐそこまで近づいてきました。

しかし、技術の進歩だけでは乗り越えられない課題があります。それが「自動運転車のトロッコ問題」です。SF映画の世界のように、いつか車が空を走り（飛び）、道路と歩道が完全に分離されるような未来が訪れるのかも知れませんが、それは

まだ先の話です。道路上に自動運転車と人が混在している限り、常に予測不能な事態が生じ、必ず事故は起こります。見えない場所から急な飛び出しがあれば、人間のドライバーと同様、自動運転車も回避することはほとんどできません。

自動運転車による死傷事故が起きた時、人は「機械の判断」をどこまで許容することができるでしょうか。いま開発者を悩ませているのは次のような問題です。

自動運転車に乗っていると、目の前に歩行者が飛び出してきました。ブレーキを踏んでも間に合いません。急ハンドルを切れば回避できそうですが、ガードレールにぶつかつて搭乗者が大けがをするか、場合によっては死んでしまう恐れがあります。さて、AIは歩行者を助けるようにプログラムされるべきでしょうか。それとも搭乗者を最優先で守るように設計されるべきでしょうか。

⑦これは、まさにモラルジレンマの問題です。人間が運転していても似たような状況に直面して、瞬間的に判断を求められることはあるでしょう。「歩行者は死んでしまう可能性が高い。自分が大けがですむなら、ガードレールにぶつかる方を選ぼう」と瞬時に回避する人がいるかもしれませんし、結果的に歩行者を轢いてしまう人もいるでしょう。しかし、仮に歩行者を轢いてしまった場合でも、ドライバーに対しては「そのような状況でとっさの判断を求めるのは酷だ」と同情的な声がかかるのではないのでしょうか。

自動運転車の場合は事情が異なります。なぜなら、緊急事態でどのように対処すべきか、事前にプログラミングすることが可能だからです。専門家は「歩行者を救いたいのはやまやまだが、搭乗者を守らない車に乗りたくないユーザーはいないだろう」と指摘します。緊急時の判断基準は「人間優先、搭乗者優先、

その上で被害を最小限にする」という原則に基づいて運用しなければ、自動運転車が普及することはないとも予測しています。事故が起きた時に優先するのはあくまで人間であり、その中でも搭乗者を最優先に考える、犠牲者が複数出そうな事故であれば被害を最小限にする方法を選ぶ、という具合です。

しかし、飛び出した方が悪いと分かっているにもかかわらず、乗られた歩行者の側には割りきれなさが残るはずです。果たして、私たちは「自動運転車は搭乗者を守るのが当然」と言いきれずでしょうか。プログラムを作成する段階では、ありとあらゆる状況が想定されるはずですが、搭乗者の軽いけがと歩行者の命を比較した際の優先順位など、設定は一筋縄ではいきません。歩行者が五歳の子どもである場合と五十代の成人男性の場合では、社会の受け止め方も違ってくるはずです。

AIは「ある人を助けるために、他の人を犠牲にすることは許されるのか」という難問に答えを出してはくれません。倫理的な判断基準をAIに委ねれば、人間の生き死にを機械に預けることにつながります。事故が起きたあとで「自動運転車がそのような判断基準で動いているとは知らなかった」と嘆いても間に合いません。納得のできる基準は私たち人間が主体的に考え、決めるしかないのです。

(名古屋隆彦 『質問する、問い返す』 一部改変)

※(文中のことばの意味)

不可抗力 : 人の力ではどうすることもできないこと。

ヒューマンエラー : 人が引き起こす失敗や間違い。

倫理 : 人として、守り行うべき正しい道。

問5 ——— 線④「人間にしかできないと思われる仕事」とはどのような「仕事」ですか。文中から四字でぬき出しなさい。

問6 ——— 線⑤「AIの得手不得手」とありますが、どのようなことですか。「得手」と「不得手」について、文中のことばを使って、八十字以内で書きなさい。句読点なども字数に数えます。

問7 ——— 線⑥「技術的な課題はいずれすべてクリアできるのではないか」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1) クリアが難しいとされているのはどのような課題ですか。文中から十二字でぬき出しなさい。

(2) (1)の課題をクリアするためには、どのようなことが必要だと筆者は述べていますか。文中のことばを使って、三十字以内で書きなさい。句読点なども字数に数えます。

問8

線⑦「これ」とありますが、「これ」について筆者はどのように考えていますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 搭乗者の安全を最優先し、結果的に歩行者を轢いてしまってもやむを得ない。

イ 予想される危険度が高ければ、搭乗者より歩行者を優先すべきである。

ウ どのような判断をした場合でも、ドライバーに正しい判断をさせるのは酷である。

エ 予測不能な事態が生じる可能性は常にあり、機械に判断させるのは容易ではない。

問9

次は文章「Ⅱ」を読んだ花子さんとお父さんの会話です。文章「Ⅰ」の内容をふまえ、xyにふさわしいことばを、それぞれ文章「Ⅰ」から二字でぬき出しなさい。

花子 「納得のできる基準」なんて考えられるかしら？

父 確かに難しい問題だね。それを考える人間自身がつつかりと考える力をつけないといけないね。

花子 でも、考える力をつけるにはどうすればいいの？

父

いろいろあるとは思いますが、身近にはじめられるところであれば、xすることかな。xの効用はたくさんあるけれど、例えば、視野を広げることができる。視野が広がると、自分の視点や思考の幅も広がるよね。

花子

なるほど、確かに視点や思考の幅が広がるわね。それに、あらゆる人の考え方や生き方を学ぶこともできるんじゃないかしら。それによって、yする力も身につくそうね。

父

そうだね。自動運転車の開発にあたって、「納得のできる基準」を考え、決めるためには、時間がかかるかもしれないけれど、われわれ人類には、考え、yすることで文化を発展させてきたという歴史がある。これからはなっていく花子にも、積極的にxしてほしいな。

花子 ええ、わかったわ。

問10 文章「I」と文章「II」は、それぞれ「AI（人工知能）

普及の未来に向け、人間はどうあるべきか」を述べています。それぞれどうあるべきだと述べていますか。また、あなたは、どちらが必要だと考えますか。次の条件にそって書きなさい。

条件

- ・ 百八十字～二百字で書くこと。

- ・ 二段落構成で書くこと。

- ・ 一段落目には、文章「I」と文章「II」で、それぞれ人間はどうあるべきと述べられているかを書くこと。

- ・ 二段落目には、一段落目で書いた内容を受けて、あなたは、どちらが必要だと考えるのかを、理由と例を示して書くこと。
- ・ 理由および例は、文中に書かれていない、あなた自身の考えを書くこと。

これで問題は終わりです。